

電車の旅が好きな理由

令和元年10月28日（月）

旅は電車に限る。もっとも各駅停車が理想だが、最近出張で電車に乗ることが多いから、もっぱら新幹線の旅になる。

時々仕方なく飛行機を利用しなくてはならない。限られた時間で遠くに行って来るには飛行機が便利である。しかし出発地と目的地があつという間につながり、途中の過程が省略されるのが何となくつまらないし味気ない。高村光太郎は智恵子抄の中で「花よりさきに実のなるやうな、種子（たね）よりさきに芽の出るやうな、夏から春がすぐ来るやうな、そんな理屈に合はない不自然をどうかしないでみて下さい」と言った。飛行機の旅はそんな気持ちに似ている。

先日新幹線に乗る機会があった。最近、通勤・通学の電車内がずいぶん静かになったという話を耳にする。言うまでも無いことだがスマートホンの普及が原因の一つのようである。電車内で周囲を見渡すと、確かに寝ている人以外ほぼ全員がスマートフォンを食い入るように見ている。そんな中、一人の老婦人が一心に本を読んでいた。すごく嬉しくなった。私の趣味はあまりに平凡すぎて話すのも恥ずかしいほどだが読書と映画鑑賞である。最も、映画の方は学生時代古い映画を探しては小さな映画館に通い詰めたものだが、最近はおっぱらDVDで間に合わせている。読書の方は最近流行の電子書籍はどうも好きになれない。読書という行為は本の内容が一番なのだが、読書の楽しみは紙の手触りや香り、活字の形や装丁までも含めた総合的なものと感じているから。

私が電車の旅が好きな理由は、時々心地よい居眠りをしながら本をじっくり読めることに尽きる。一回の旅行で行き帰り、そしてホテルでほぼ2～3冊読むことになる。今回の旅行では途中まで読んでいた小説を読み上げた後、目の前の椅子ポケットに「トランヴェール」という薄い冊子を見つけた。早速、手にとって目を通してみた。巻頭には大好きな「深夜特急」の著者沢木耕太郎のエッセイ。ほんの数分で電車の旅の楽しみを教えてもらい幸せな気分になった。旅の友に一番ふさわしい作品を書く作家は彼であることを確信した。これから電車の旅では彼のエッセイ集を必ず鞆に忍ばせることにしよう。

さて先の老婦人は何を読んでいたのだろうか。そんな事を考えながら、私と同じように読書で旅を楽しむ人と出会う事が出来（正確には目撃出来たのだが）ほっとしたひとときであった。